

Slow life, Fast life

村越 真

ナビゲーションというスキルの広がりを感じた一年の締めくくりにふさわしく、歳の暮れはナビゲーション関係の仕事に追われた。

歳が明けて、いよいよ最後のシーズン。初日から気合が入る？

トップランナーとのおしゃべり

12月22日

東京に仕事で出てきたついでに、群馬の水上にいる田中正人を訪れた。彼は、かつては多摩オリエンテリングクラブの若きエース、そして今ではアドベンチャーレースの第一人者だ。その活躍はメール見てはいたが、直接彼の活動に触れるようになったのは、昨年5月にアドベンチャーレースの講習会で、僕がナビゲーション分野の講師をして以来のことだ。

その講習会は、オリエンテリングにおけるナビゲーションの特殊性を意識させてくれるのに役立ったと同時に、ナビゲーションの本質はアドベンチャーレースだろうが登山だろうが変わらないことを再認識させてくれた。それと同時に、閉塞感のあるオリエンテリング界が、その周囲にあるアウトドアスポーツと協力関係を持つことで、世界が広がる可能性にも気づかせてくれた。この日の訪問は、その時以来、田中正人と一度はゆっくり話したいと思っていたことを実現させたものだ。

関心を共有するトップランナーとの話はずきることがない。決めたテーマがあったわけではなかったが、帰りの新幹線の時刻までの2時間あまりを、彼のアパートで、奥さんの



年末のジュニア合宿で、日本のジュニアを指導するヤリ・イカヘイモネン氏(フィンランド)

靖恵さんともども話し続けた。本当は今春にヤマケイから出すアドベンチャーレースブックの原稿の材料を彼から得ようと思っていたのだが、その話を忘れてしまうほど、「おしゃべり」に熱中した。

アマチュアからプロになることを選択した彼は、しきりにオリエンテリングの運営においてボランティアが強調されることをいぶかしがっていた。確かにオリエンテリングは、昔から地域や学生クラブの自発的意思で大会運営がなされてきた。その結果、参加者増加やサービス向上についての十分なエネルギーが注がれてこなかった。

しかし、このことは同時に、オリエンテリングの大会運営が定型化されたルーティンワークではなく、創造的で知的な興味をそそるものである証とも言える。今から30年近く前に、黎明期のオリエンティアによって地図調査や大会運営にどれだけの創意と工夫が注がれたかを考え

てみよう。あるいは、初期のインカレにおける、それまでの大会にはなかった様々なプログラムの導入を。こうした熱意を考えると、ボランティアとプロの違いは、さほど本質的なものではない。もちろん、彼の「ボランティアへの疑問」は、それを改めて意識させてくれた鏡ではあったのだが。

ジェネシスマッピング

12月23日

東京で一泊し、翌日は仕事、仕事、仕事、仕事の休日となった。怪我で走れずに終わった昨年末、少しは生活をスローにしようと思ったけれど、結局今年もファストライフでつっぱしり続けた。僕にスローな生活があるとしたら、こうした仕事の合間の仲間たちとの雑談や喫茶店や新幹線で義務としてではなくワープロに向かう瞬間になのだろう。

スローライフという言葉は、ファストフードに抵抗して、伝統的な食

を守ろうというイタリアのスローフード運動とともに広がったというが、スローフードとは単にゆっくり食事をするでも珍品を味わうことではなく、食に対しての意識を高める運動であるように、スローライフも、単に「ゆっくり生きる」ことではないはずだ。

朝11時に岩波書店を訪れ、秋に出版を予定している地図本の編集者と打ち合わせ。その後、食事をしながら上田と3月に出版するアウトドアでのGPS利用の本についての最終打ち合わせをする。池袋でクリスマスの買い物をした後、小林岳人と、地図理解に関する実験の打ち合わせをした。

この日のクライマックスはジェネシスマッピングの設立総会である。これまでオリエンティングのプロ的サービスを一手に引き受けてきたRMOの山川、それをサイドから支援してきた上田が生みの親となり、僕が名づけ親となった、オーダーメイドの地図とナビゲーションを業務とするニッチ企業だ。神は言葉を発することによってこの世界を作った。その世界を人が使えるものにするのが、私たちが汗水たらして作成する地図なのだ。

ウィルフォードは、「地図を作った人々」の中で、グランドキャニオンという地図化がもっとも難しい場所での測量作業に従事する測量士を登場させた。測量士は日々の仕事を終えてキャンプでその一日の仕事を振り返りながら、こんな台詞をばく「今日一日私たちが仕事をした分、人類の知識が増えたのだ。」伊能忠敬が、カッシーニ親子が、ブーゲーやコンデミーヌが、同じような感慨を持って一日を終えたことだろう。

地図を作る仕事とは、人類の知識を増やし、大地を作る仕事にも等しい。これがジェネシス(創世記)という会社名の由来である。地図の持つ重要性をアピールするとともに、私たちの仕事への自負を示した社名である。

この日一日に私が経験した忙しさは、地図やナビゲーション技術という文化が、社会に求められているものでありながら、十分に満たされ

ていないことの証でもあった。

12月28 - 30日

ナショナルチームとジュニアの合同合宿が富士で開催された。ジュニアの専属コーチであったはずの昨年は、初日の設置時に倒木に激突し、7針縫う大怪我で早々とリタイア。十分な指導が受けられなかったジュニアに不満もあったという。僕にとっては、それに対するリベンジの意味を含めた合宿であった。

チーフコーチの尾上さんは前日から現地に入り、歩測とコンパスワークの練習のためのコースをすでに準備していた。このコースは、トレインの平坦な部分におかれた3つのスタートと錯綜する30近いレグからなるもので、それぞれのレグが1枚のシートに記載されていた。参加者はこのシートから1枚を取り、歩測とコンパスワークの精度を納得いくまで繰り返し確認するというものだった。

よく準備された練習の合間に、僕は時々参加者に対してコメントを入れた。今回の合宿ではこの他にも、プランニングなど基礎的な練習が数多く行われた。基礎的な技術でも、実際にやってみると、参加者はそれぞれの解釈とやり方で行う。また実際にレグを走ってみると、技術の遂行を阻害する様々な要因に出会う。それにどう対処するのかというノウハウの獲得こそ、うまくなるということなのだ。計画された練習という基盤の上に即興で必要な指示やコメントを与えていくことこそ、指導者の役割だ。またその中に、練習の本当の意味が隠されている。

たとえば、事前に地図を見てレグをどう走るかを文または略図にしてから走るといったプランニング練習が課されたでしょう。同じ課題が課されても、参加者のやり方は様々だ。紙を地図の脇に置いて丁寧に書き写すかのようにしているものもいる。実際のコースではこんなにプランに時間をかけることはできない。地図からの情報を頭の中に入れて、それを予期しながら走るのが普通だ。このプランニング練習を実践的なものにするには、それを模して行わなけ

ればならない。それに気づき、それを修正していくことが、練習なのだ。決して決められた計画や行為をこなすことが練習なのではない。

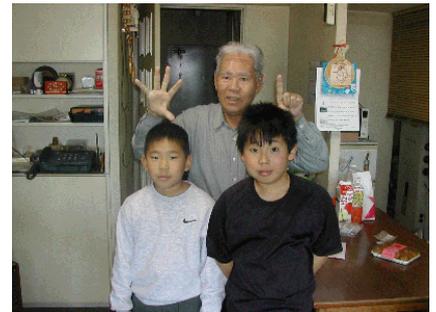
準備と適度な介入が、合宿をインパクトあるものにしたようだ。

1年の計は元旦にあり

1月1日

僕にとって、最後のシーズンとなる年が明けた。「一年の計は元旦にあり」という言葉を僕は信用しない。計は思い立った時にあるべきだし、思い立つ時は、元旦など待たずにいつでも計を立て、それを実践していくべきだ。

しかし、大きな目標に気持ちが向かっている時には、正月というハレの時にあっても、地道な努力が自然にできるものだ。大晦日をチャコの実家である埼玉県南部の新座で過ごした後、元旦は僕の実家のある大田区大森に行くことになっていた。迷わず、この区間を走ることに決めた。



大森で家族と

家族が車で大森に向けて出発する2時間前の11時、僕は新座を出発した。中学校時代毎日使っていた大泉学園の駅を通過する。駅は昔の姿が想像できないほどに変わってしまっていた。そこから敢えて裏道を通り、母校である学芸大大泉中学校の裏を通過する。石神井公園では、わざわざ公園内に入り、三宝池の周囲の遊歩道を通過する。この地域に暮らした中学校時代に、僕はオリエンティングを始め、この地域の森や林に親しんだのだ。自分のオリエンティングの原風景に感傷をいだきながら、武蔵野の一角を通過し、青梅街道、環七と大森を目指した。

極寒の地図調査

1月4, 5日:

11月に30日間にわたりプロマップを投入し、自分自身6日間も地図調査に費やしていた陰で、インカレの地図には依然大きな穴が空いていた。この穴をふさぐべく愛知県の下山での地図調査に赴いた。

92年2月に恵那インカレの調査に借り出され、冬の調査への対処法は心得ていたつもりだし、96年の常磐インカレでは霧氷ができるような気候下での調査も経験したが、今回の調査はそれ以上に辛かった。天気は快晴だったのに、おそらく日中でも気温が0度を超えなかったのではと思わせる寒さだった。

更にひどいのが手先の冷えだ。こういう体質は遺伝とは無縁のものなのだろうか。南極にいく父親を持っているながら、僕の指先は血行が極端に悪くて、寒さにも異様に弱い。気温が18度を切る場所で集中を要求する作業をすると、指先は冷え切って、間違いなくしもやけになる。11月や3月下旬は要注意だ。体幹は少しも寒いと思っていないのに、指先はしっかりしもやけになる。

特に5日の寒さは厳しく、ものの30分もたたないうちに、指先の感覚が全くなかった。それをだましまししながらの調査となった。調査を生業とする山川、2日から連続4日も調査に入っている中村弘太郎も消耗した様子。感謝してほしいとは決して思わない。今年は、誰が僕らの思いを超える走りを見せてくれるだろうか。

1月8日: フィンランドへ

IOFの理事会は、夏を除くと1月と4月に開かれる。開催地はたいへいヘルシンキなので、どちらでもできれば行きたくない季節だし。たまにはニースとかカンヌあたりでやってくれないかな。

今年はとりわけ寒いらしくて、雪も多い。到着した8日に走った時には0度前後と暖かかったが、その後天気がよくなるにしたがって気温は下がり、11日は早朝マイナス25度の中を40分間ジョグした。さすがにこの気温で呼吸しつづけている

と、20分くらいで胸焼けのような感じになる。10日のジョグでこりて、11日はヘアバンドをマスク代わりにして走る。吐いた息の湿気がヘアバンドの外で霜になり、さらに睫毛にも氷つく。まあ3日くらいだから、珍しい体験で済ませられるのだが。北国の人の苦労がしのばれる瞬間である。

今回の理事会は、フットやスキー、トレイルその他の委員会と合同で行われた。現在理事も含めてIOFの役員・委員は70名強。42の加盟国のうち27国がなんらかの委員を出している。さて、その中で日本は何人を出し、ランキング何位か、ご存知だろうか?

理事の村越をはじめ、トレイルの小山太朗、ITの羽鳥和重の3人の人的貢献をして、なんと7位なのである。しかも、この順位はスウェーデンより上なのだ! もっともスウェーデンは副会長のオーケ・ヤコブソンと、エリート競技のあり方を牛耳るビヨルン・ペルソンという重職を出して、IOFの方向性を実質的にリードしている。そんな「政治的な野望」も持たずに3人も人的貢献をしていることを、日本のオリエンテーリング界はもっと誇ってもいいと思う。



IOFの理事会の夜の親睦会で、紙飛行機投げに意地になるIOF役員の方々(左で紙飛行機を投げようとしている女性が、トレイル0委員長のアン・ブラギンス)

このIOF理事会で特筆すべきこ

とは、会長のスーが、ここ数年ではじめて一般への普及の重要性、草の根の普及と参加の重要性を強調した点である。

ここ数年、IOFと世界のオリエンテーリングシーンは、エリートのプロファイル向上に向けられてきた。エリートのレースをいかに見せるかに向けられてきた。それを一体誰が見るかという根本的な問題を忘れてしまったかのよう。

昨年10月のオーストラリアの世界マスターズでは、オリエンテーリングはもっとも参加者の多い個人競技の一つであった。また歴史的に見ても、オリエンテーリングは一般のシニアに対して、充実した国際大会を30年以上にわたって提供している。この文化こそ、オリエンテーリングのもう一つの武器になるはずだ。

12日

朝9時ごろ成田空港に到着。その足で千葉市の昭和の森森林公園に行く。エリートのレースには大遅刻だが、レース後に走らせてもらって49分のタイム。その後、エアロビクスセンターでランニング主体の合宿。夜は学芸大学の有吉先生を招いてランニングについての講義をしていただく。市民ランナーから見れば教祖のような有吉先生の話の直に聞けるのも、世界選手権に向けての強化プランが進んでいるからこそである。選手たちからは、有吉さんの話よりも、彼が連れてきた、今年からNTT東京で一般社員として働きながら競技生活をしている中田さんの話の方が人気があったようだ。

翌朝は、中田さんを中心に「もちろん朝練」



17日

静岡県内は地域的な広がりを受験者数の割りに国立大学が少ない。そのため、毎年沼津の高校を借りて試験を実施している。今年はいくじ引きで、この沼津の試験監督になったしまった。校門で臨時バスの出入りの整理をしたり、受験生を誘導したりという仕事だ。

周囲の車の迷惑を顧みずに路上駐車する親、雨が降っているからと午前午後と送り迎えする親。親の過保護ぶりが垣間見える。朝は予備校の先生や高校の先生が「激励」にやってくる。中には「先生、時計忘れちゃった。貸して!」といった高校生もいる。大人の嘆く若い子の行動は大人たちが作っているのだ。

土曜日は、スコード代表の宮川を招いて、沼津のすし屋で「政談」。

25、26日

インカレ地図調査。1月上旬の寒さに懲りて、新しい手袋を購入したり、カイロを買ったりと万全の体制で臨むが、拍子抜けするほど暖かかった。調査のはかどりは今ひとつだが、少なくとも身体的なダメージはなかった。

久しぶりのOL三昧?

2月2日

森林公園ミドルレース。エントリーはしたものの、1月後半の忙しさで弱気になり、参加を諦めていた。なにしろ、1月中に本2冊、雑誌原稿2つを仕上げなければならなかった。

それでも体調が戻り、集中して仕事ができるようになると、意外と仕事というのは片付くものだ。仕事はかどると、精神的にも復活する。

2月に入ってみると多少余裕もできたし、早稲田も参加できない中、個人レースをひとつでも多く経験しておきたくて、無理して出かけることにした。決勝ではトップと40秒ほどの4位。昭和の森の圧倒的タイム差に比べれば、十分戦えるという実感を得た。

帰りに駅まで送ってくれた利佳ちゃんに、「Oマガジン読んでるけど、

ぜんぜんスローライフじゃないですね」と言われてしまった。僕にとってのスローライフは、ゆっくりした生活ではなく、緊迫感の中で時を忘れるように仕事に熱中することにあるのだろう。この連載を書きながら、そのことに気づいた。

11日

先週末の天気予報では雨だったが、それでもインカレ地図調査すべしの厳命が山川より下る。こういう時は、自分であれこれ迷うより、「命令」を受けの方がかえって気が楽なものだ。自分を辛い時間に追い込むという苦渋の選択をする必要はない。後は身体的に辛いだけだ。40歳すぎて、雨の中地図調査なんて、絶対間違ってる。まだ雪の方がましなものだ。

その後、週明けの天気予報では天気がずれた。10日の夜が雨。11日は朝から曇りだが、なんとか昼過ぎまでは持ちそう。時折暗くなる空におびえながら、とにかくノルマの女子エリートのレッグとその周辺は仕上げなければならない。

こんな時期にインカレの地図調査をすると、決まってそのコースを走るであろう彼あるいは彼女の顔と走りが頭をよぎる。この日の作業領域は女子コースの核心部。

「畜生!マイクのやつ手を抜きやがったな!」一次調査者に毒づきながら6時間、必要な範囲をほぼ終えたちょうどそのころから、雨が降り始めた。6時間の調査で、地図も納得いくレベルに仕上がる。彼女たち同様、僕にもチャレンジングなレッグだった。

9時までかかって作図を仕上げ、帰宅。雨が止んでいたため、11時すぎより軽くジョグ。

13日

静岡市の学校で「体験活動の危険」についての講演。夜帰って、10時過ぎから17kmのLSD。半年前なら走ろうという気持ちにもならなかっただろう。3日ほど雨や行事で走行距離が落ちていたので、気持ちよく走れた。

寒さが早く訪れた今年は、春の訪れも早いようだ。夜の寒さが少しづ

つ和らぎ出すことで、春の訪れを知る。

15日

早稲田大会。早稲田大会は、学生のころから全日本に向けての最後のチェック・調整の意味を持った重要な大会だった。今年もそのつもりでいたのだが、これも「体験活動の危険」についてのパネリストの依頼が入って、キャンセル。パネリストの時間帯は午後なので、コントロールのカッシーに頼み込んで、朝前走をさせてもらうことにする。充実感はあったが、さすがに疲れた。



森林公園での合宿にて